

7月20日（月）サムエル記第二22章8～16節

「地は揺らぎ、動いた。天の基も震え、揺れた。主が怒られたからだ。」（8節）

8節に「地は揺るぎ、動いた。天の基は震え、揺れた」との表現で主の怒りを表しています。主は何に対して怒られたのでしょうか。それは、ダビデが暴虐と敵の中に置かれ、死を覚悟するような苦しみの中にあったことに対してです。神はダビデを愛しておられたので、彼が苦しみ、悩んでいることに対して心を痛み、ダビデを悩まされている敵や暴虐に対して怒りを燃やされたのです。それほどまでに神は、ご自分を愛し、ご自身により頼んでいたダビデを愛されました。それと同時に、地は人が生きていく基盤を表し、天は神ご自身がおられる場所を指しますが、神の怒りは人間が生きていく基盤を揺るがし、天上に達するほど大きいということです。まさに、人はこのようにして怒られる神を恐れなければなりません。

8節から見てまいりますと、地、天、黒雲、風、闇、濃い雲、雷鳴、稲妻などの自然現象が列挙され、それを通して主の働きが表現されています。人はこれらの自然現象に対して無力です。しかし、天地万物の創造主であられる神は、これらのものを治め、これらのものを用いてご自身の偉大さ、力、栄光などを現わされるお方です。そして、11節「主は、ケルビムに乗って飛び、風の翼の上に自らを現わされた。」とは、特に主は戦う戦士として自らを現わしていると言えます。まさに主はダビデの祈りにこたえて、彼の敵と戦われるために来られました。このように、天地万物の造り主である神に敵対することは、いかに恐ろしいことであるかを私たちは知らなければなりません。それとは、逆にダビデのように、このような神を自らの神として、この神に祈り、神が助けてくださることを信仰によって待つことができることは何と幸いなことだろうかと思わされますし、この主を信じる信仰をもって歩むならば、私たちには恐れるものは何もないことを思わされます。私たちも主の民とされている一人ひとりなのですから、主の御前に声をあげて主の助けを祈り求めましょう。主は必ず助けてくださいます。

7月21日（火）サムエル記第二22章17～20節

「主は私を広いところに連れ出し、私を助け出されました。主が私を喜びとされたからです。」（20節）

17節の表現は、5節の「死の波は私を取り巻き、滅びの激流は私をおびえさせた。」に対応しています。つまり、死の波、滅びの激流の大水から主の御手がダビデを捕らえて、そこから引き上げられ、助けられたということです。18節でダビデは自分の敵、ダビデを憎む者は確か

に自分より強かったことを告白しています。しかし、主はダビデの敵よりもはるかに強い方なので、ダビデを力ある敵から救い出されました。このことは２０節で「主は私を広いところに連れ出し、私を助け出されました。」とされています。なぜなら主がダビデを喜びとされたからです。主が喜ばれるのは、どのような人たちでしょうか。まず、謙遜な者です。そして主のみここから従って生きようとする者、主を愛する者たちです。私たちは主が喜ばれる歩みをしているでしょうか。

１９節に「けれども、主は私の支えとなりました。」とあります。わがわいの日に、主はダビデの支えとなりました。私たちも日々の歩みの中で、悩み、悲しみ、苦難などさまざまなことが起こり、特に、それらのことが予期しないかたちで起こることがあります。しかし、そのような時に、主が私たちの支えとなってくくださることは何と幸いなことでしょうか。ここでもう一度主がどのようなお方か思い出しましょう。主はどんな敵よりも強く、主に立ち向かうことのできる者は誰もありません。それと同時に、主は私たちのことを心から愛していてくださいます。このようなお方が私たちのことを支えていてくださるのです。もしこのことを信じることができるなら何が起こったとしても決して恐れる必要がありませんし、思い煩う必要もありません。私たちは主の支えを今も信じているでしょうか。

7月22日（水）サムエル記第二22章21～25節

「主は、私の義にしたがって私に報い、手のきよさにしたがって顧みてくださいました。」

（21節）

昨日１７～２０節で見ましたように、主はダビデを救い出され、支えとなり、助け出されました。そして最後に「主が私を喜びとされたからです。」（２０節）と言いました。そのようにして、主がダビデを祈りにこたえて助けてくださったことに対して２１節では「主は、私の義にしたがって私に報い、手のきよさにしたがって顧みてくださいました。」２５節では「主は私の義にしたがって顧みてくださいました。御目の前の、私のきよさにしたがって。」と言っています。つまり、主が喜ばれたのは、ダビデの義ときよさによるということです。その義ときよさについては２２～２４節に語られています。私たちは、ここだけ読みますと、ダビデはいかに高潔な人物だったのだろうかと思ってしまうかもしれません。私はダビデのように、「主の掟から、私は遠ざかりませんでした。」（２３節）とか「私は主に対して全き者。自分の咎から身を守ります。」

（２４節）などとはとても言えないと思ってしまうし、実際にこれまでサムエル記を通してダビデの姿を見てまいりましたが、バテシェバとの姦淫の罪をはじめ、いくつかの過ちがあ

ったことを知っています。ですから、ダビデも自分の人生を謙虚に振り返れば、とてもこのようなことは言えないのではないかとも思ってしまいます。実際に、「もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。」(ヨハネの手紙第一1章8節)とありますが、旧約の時代を生きていたダビデは、このようなことを知らなかったのだらうかと思ったりもします。しかし、決してそうではありません。むしろ、ダビデは自分がいかに罪深く、主のみこころにかなわない存在であるかということをいやというほど知らされていきました。「ご覧ください。私は咎ある者として生まれ 罪ある者として 母は私をみごもりました。」(詩篇51篇5節)と言っているとおりです。しかし、ダビデは自らの罪を示された時に心から悔い改めました。特に、バテシェバとの姦淫の罪を犯した後、サムエル記第二12章13節から見ますと、二人の間に生まれた子は主が打たれたので病死してしまいます。恐らくダビデは、この経験を通していかに自分が罪深い者であるかを思い知らされ、心から悔い改めたことでしょう。その真実な悔い改めが彼を神の喜びとし、神はそれを彼の義、心のきよさとしてくださったのです。

私たちも主イエス様にあつて示される罪を真実な信仰をもって心から悔い改めるなら、その信仰を主は喜びとしてくださり、私たちを義とし、きよい者とみなしてくださり、祈りに答えて、私たちを救い出し、助け出し、支えとなってくださるのです。私たちの悔い改めはダビデのように真実なものとなっているのでしょうか。

7月23日(木) サムエル記第二22章26～30節

「主よ、まことにあなたは私のともしび。主は私の闇を照らされます。」(29節)

26～28節を見ますと、主は、それぞれの人にあつて報いをされるお方であることが分かります。それは、すべての者の歩み、行動、生活などすべてを主がよくご存じであることを意味しています。もし私たちが主の御前に常に良心の曇りなき生活をしているなら何の問題もないのですが、そうでなければ、主に自分のすべてが知られているということは、ある意味恐れの対象ともなり、決して平安でいられないことでしょう。むしろ、私たちは主への恐れをもって、へりくだりって、主のみこころに従う歩みをすべきです。

29節「主よ、まことにあなたは私のともしび。主は私の闇を照らされます。」のみことばは、私たちに詩篇119篇105節「あなたのみことばは 私の足のともしび 私の道の光です。」のみことばを思い出させます。ですから、主はダビデの足のともしびとなって、彼が行くべき道を明るく照らして、みこころにより導かれるお方です。ですから、ともしびである主に従う

なら決して迷うことはありません。そして、主は私たちに対するともしびでもあります。主は私たちの行くべき道を明るく照らし、迷うことなくまっすぐに進むようにと導かれます。ところが、私たちの罪の性質が、私たちが主の導かれる道へ進むことをしばしば妨げます。そして、自分の良いと思う、主が導かれてない所へ進んで行き、しばしば道に迷って途方にくらせてしまうことがあります。しかし、そのような時であっても、主は決して捨てることなく、「私の闇を照らされ、」行くべき道をはっきりと示してくださり、悔い改めて主の照らされる道へと進むように導かれます。私たちもまっすぐに主が導かれる道を進んでまいりたいと思いますし、もし闇の中を進んでいると思われる時には、悔い改めて主の導かれる光の道を進んでまいりましょう。

30節のみことばを、何かの比喻だと考える学者もあり、可能性としては、主の戦いにおける勝利を表しているように思います。ここで大切なことは、自分たちの軍事力や武器の多さや戦略による勝利ではなく、私の神である主によって勝利を得たということです。私たちも、主によって助けられたなら、すべての栄光を主に帰して、主の御名を高らかにほめたたえ、主に感謝をささげる者たちでありたいと願います。

7月24日(金) サムエル記第二22章31～46節

「主のほかに、だれが神でしょうか。私たちの神のほかに、だれが岩でしょうか。」(32節)

昨日、30節「あなたによって」「私の神によって」のことばから、自分たちの軍事力や武器の多さや戦略による勝利ではなく、私の神である主によって勝利を得たことを学びました。今日の箇所を見ますと、「主は」(34節)「あなたは(の)」(36, 37, 40, 41, 44節)という言葉が何回も出てきています。つまり、ダビデは戦いに自分の力で勝利をしたとは決して思っておらず、勝利は主によってもたらされたと思っていたはずです。特に今日、目を留めたいのが、「主は、私の足を雌鹿のようにし、高い所に立たせてくださいます。戦いのために私の手を鍛え、腕が青銅の弓も引けるようにされます。」(34, 35節)「あなたは、戦いのために私に力を帯びさせ、向かい立つ者を、私のもとにひれ伏させました。」(40節)のみことばです。これまで旧約聖書の中で、イスラエルと敵とのさまざまな戦いの様子を見てまいりました。その中で、直接的な主の働きによってイスラエルが勝利をしたことがありました。その一方で、34, 35, 40節のみことばにありますように、主が強めてくださることにより、イスラエルが戦いに勝利をすることもありました。その場合には主が戦いのために備えさせた者たちを主が戦いのために用いられたということです。私たちにも十分な備えが与えられることにより、

主の戦いに出て行き、勝利を取る者たちでありたいと思わされます。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」(エペソ人への手紙6章12節)とありますように、私たちの戦いは、目に見えるものとの戦いではありませんから、もちろん自分の力では勝利することができず、主からの備え、特に「腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべての上に信仰の盾を取りなさい。～ 救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。」(エペソ人への手紙6章14～17節)とありますように、これらのものが必要ですから、主が戦いに備えさせてくださるように祈りましょう。そして、主は私たちに必ず勝利を与えてくださいます。そして、私たちが勝利して、信仰を守り抜いたその時には、「主のほかには、だれが神でしょうか。私たちの神のほかには、だれが岩でしょうか。」と、ともに主を心からほめたたえましょう。

7月25日(土) サムエル記第二22章47～51節

**「主は生きておられる。ほむべきかな、わが岩。あがむべきかな、わが救いの岩なる神。」
(47節)**

47節「ほむべきかな、わが岩。あがむべきかな、わが救いの岩なる神」50節「それゆえ、主よ。私は国々の間であなたをほめたたえます。あなたの御名をほめ歌います。」と、ダビデは主をほめたたえています。その理由は、48、49節に書かれてあるとおりなのですが、ここを見ますと、ダビデは自分の戦いにおける勝利は、すべて主の働きであり、主の助けによると認識していました。ですから、彼は主を心からほめたたえたのです。

私たちも日々の歩みの中で、主が私たちを助けてくださった理由を常に主の御前に告白し、主をほめたたえているでしょうか。主が、このようなかたちで祈りに答えてくださった、主が私をこのように助けてくださった、迷っていた時に祈りに答えて、主はこのような導きを私に与えてくださった等々、主に感謝をし、主を心からたたえる理由はいくらでもあるものです。そして、私たちの側でへりくだらなければ、主への感謝や賛美は出てまいりません。なぜなら、何でも自分でやった、自分の力で成功した、自分の力で生きているんだと思い込んでしまうからです。主への感謝と賛美が常に口からあふれて、主が顧みてくださることを心から感謝する者でありたいと思わされます。

「主は生きておられる。」(47節)とあります。なぜダビデは、このようなことをここで口に出しているのでしょうか。もちろんこのことをダビデが知らなかったわけではないでしょうし、

信じていなかったとは思えません。むしろ、主が向かい立つ者から引き上げられ、不法を行う者から救い出された時に、あらためて「主は生きておられる」ことを実感したのではないかと思います。私たちも日々の歩みの中で、主は生きておられると思わされることはないでしょうか。そして今日も「主は生きておられる」ことを自らの信仰として自分のなすべき務めを果たさせていただきましょう。「主は生きておられる。」

7月26日（日）サムエル記第二23章1，2節

「これはダビデの最後のことばである。エッサイの子ダビデの告げたことば。いと高き方によって上げられた者、ヤコブの神に油注がれた者の告げたことば。イスラエルの歌の歌い手。」
（1節）

はじめに「エッサイの子ダビデ」とあります。ベツレヘムの田舎に暮らすエッサイの末子であり、羊飼いであったダビデが、王となりました。それはいと高き方によって上げられた者として説明されています。上げられた者とは、王に即位したことを意味しています。つまり、ベツレヘム人エッサイの末子を召し、イスラエルの王とされたということです。

ここで主をいと高き方と呼んでいます。これは、主にある権威と力を意味しています。主が働きのために人を召す時には、主が持つておられる権威と力によることをもう一度おぼえさせられます。それとともに、主の召しは、人の思惑や考えなどをすべて超越していて、思いもかけない者を召して主の働きに用いられることがあります。ですから、私たちも自分のような者がとは思わず、主の召しを信じて、主の働きにあずかっていただきたいと思います。召された者を整えてお用いになるのが主であり、召した者を主ご自身が責任をもって最後まで導いてくださいます。次に「ヤコブの神に油注がれた者」とダビデは言われています。ダビデは、ヤコブの神である主から、王の働きに就くために油注ぎが与えられています。召しは、任職の油注ぎによっても確認することができます。

2節の「主の霊は私を通して語り、そのことばは私の舌にある」とは、ダビデが預言者としても召されたことを意味しています。イスラエルの国の王でもあり、預言者でもあったということです。特に、本当の預言者とは、その人が何かを語るのではなく、主の霊がその人を通して語る者です。そして、今は聖霊様がみことばを通して私たちに語りかけ、真理へと導き入れてくださいます。私たちは、聖霊の働きに信頼して、主のみことばの私たちへの語りかけられたとおりに信じて従う者でありたいと思わされます。そこには必ず主からの祝福があります。